

特252

755

和十二年三月

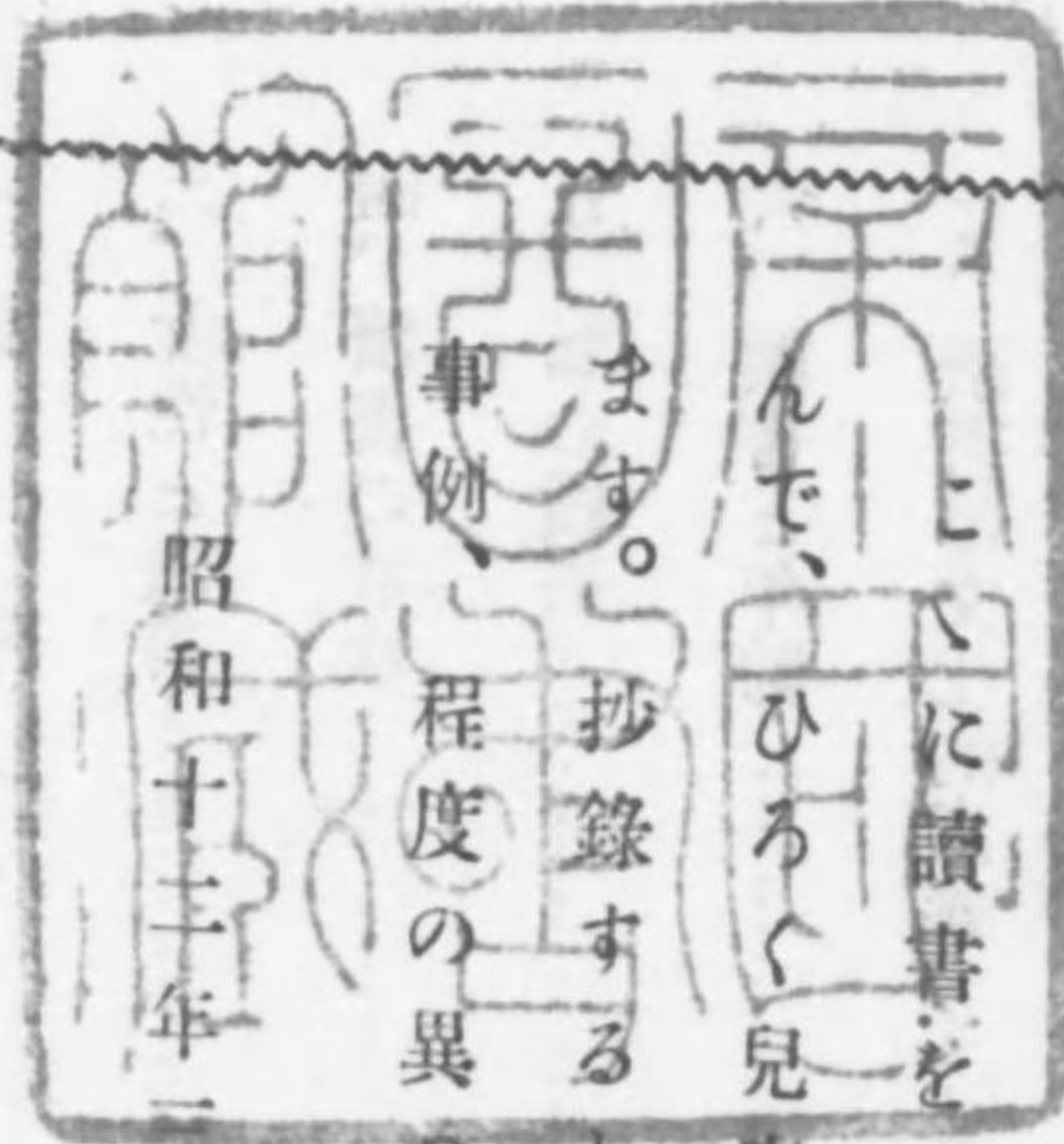
讀書のすすめ

山口縣中央圖書館

始



特 52
755



昭和十二年三月

こゝに讀書をおすゝめするため、この小冊子を編んで、ひろく児童、青年、大人、各方面の人々に頒ちます。抄録するところの九篇も、従つて、いろいろの事例、程度の異つたものを努めて選びました。

編

者

發行所寄贈本



目次

一、明治天皇御愛讀の御書籍の御様子……………	中山久四郎……………一
二、讀書……………	三田一夫……………五
三、女性と讀書……………	椎貝彌生子……………八
四、讀書の鼓吹……………	市島謙吉……………一〇
五、私の讀書……………	鳥居龍藏……………一四
六、讀書と年齢……………	千葉龜雄……………一七
七、讀書の文化的意義……………	内田魯庵……………二一
八、科學者としての讀書……………	小酒井不木……………二三
九、野山獄讀書記……………	吉田松陰……………二六

讀書のすすめ

一 明治天皇御愛讀の御書籍の御様子

中山久四郎

畏くも 明治天皇御一代の盛徳鴻業はこゝに繰り返して申上げ奉るを要しない。又日夕御聖徳を御追懐申上げ奉らない日はない。

大帝陛下が絶世の英主として有したまひたるさまぐの御聖徳の内に頌へ奉るべき一つとして陛下が歴史漢學の道に軫念を御注ぎ遊ばされたる御事を擧げ奉ることの出来るのは、特に私どもの畏れ多くも又感喜し奉るところであります。

「東京城日誌」を見ますと、明治の初に於ける先帝陛下の漢學及歴史に關する御修養の一端を窺ひ奉ることが出来ます。同日誌第一、明治元年戊辰歲十月に、東京城御駐輦中の御日課

として、左の一條が記してあります。

御駐輦中御日課

一六 御休日

二七 〔朝〕御手習
〔晝〕史記御講義 御學問所

三八 〔朝〕保建大記御輪讀
〔晝〕御馬

四九 〔朝〕御手習
〔晝〕神皇正統記御輪讀

五ノ日 資治通鑑御講義 小御所

右之通御定之事

明治元年といへば、いふまでもなく内外國事多端の時である。しかるに御勉強御講究あらせられしこと斯くの如くである。まことに感佩すべき御事と存じ奉ります。右の如く記載の、神皇正統記、保建大記、資治通鑑及史記等の史籍は、以て 明治天皇のいかに歴史及漢學に聖慮を注がせたまひしかといふことを窺ひ奉るべきものである。

明治天皇御愛讀の御書籍の御様子につきましては、明治神宮の内苑にある寶物殿を拜見して大いに得るところがありました。

寶物殿は、大正十年十一月一日始めて御開館の時と、十一年九月五日と、兩度拜觀いたしました。陳列の御物數々ある中に、歴史及漢學に關する御愛讀の御書籍は左記の通りであります。

古事記

明治元年四月大阪行幸御駐輦中東本願寺掛所ニ於テ福羽美靜始メテ進講セシモノナリ

日本書紀

明治二年四月侍讀福羽美靜始メテ進講セシモノナリ

五經

右ノ中詩經ハ明治二年正月侍讀中沼了三始メテ進講セシモノナリ

四書集註

右ノ中論語ハ明治十一年二月侍講元田永孚大學ハ明治十二年五月中庸ハ明治十二年十月共

ニ侍講副島種臣始メテ進講セシモノナリ

春秋左氏傳

侍講元田永孚時々御質問ニ奉答セルコトアリ
萬國通史

侍講西村茂樹加藤弘之時々進講セシモノナリ
名臣言行錄

御愛讀ノ書ニシテ時々御覽アラセラレタリ
皇朝史略

明治六七年ノ頃侍講福羽美靜時々進講セシモノナリ
神皇正統記

明治七八年頃侍講福羽美靜時々進講セシモノナリ
貞觀政要

明治八年十二月侍講元田永孚始メテ進講セシモノナリ
太平記

最モ御愛讀ノ書ナリキ

四

佛國政典

明治八年十二月侍講西村茂樹始メ之ヲ進講シ御精讀アラセラレタルモノナリ
十八史略

明治二年六月侍讀秋月種樹始メテ進講セシモノニシテ最モ御愛讀ノ書ナリキ
唐鑑

明治九年一月侍講元田永孚始メテ之ヲ進講シ十年頃ニハ特ニ御勉學アラセラレタルモノナリ

以上の説明文は、一々寶物殿の御揭示の原文によつたものである。斯道斯文御勉學の聖慮はこれを拜讀するにつけても實に有難く感激するところであります。(史學及東洋史の研究)

二 讀 書

大石橋小學校六年

三 田 一 夫

五

僕の内に上つて来て「うわつ」と先づ聲を立て、驚くのは本のたくさんあることであらう。普通の本箱の四倍くらゐもある、黒い色の本箱には、地理の本をはじめ、英語、歴史、修養全集等が四五百冊も並べてある。それでも入らないので、外に小さなものが三つある。一つには寫眞帳、日の出、キング、その他こま／＼した物が入れてある。

僕の内のはみな讀書家だ。特にお父さんは毎夜七時頃から九時頃まで読んでゐらつしやる。朝は朝で又読むのは新聞だ。「ことつ」と音がすると、とんで行つて、ひつぱりだこで讀む。エ國と伊軍の戦争のことが書いてあると、それこそ、ごはんも忘れてしまふくらゐだ。時たま新聞のこない日があると、その日一日さびしいやうな氣がする。

リンカーンは小さい時、ワシントン傳といふ本がすきであつた。それと同じやうに、僕は立志奮闘物語といふ本がすきだ。それには、野口英世、高橋是清、若槻禮次郎、後藤新平等の小さい時の苦心や奮闘が、目の前に見るが如く書いてある。

僕は一心に野口英世のことを研究してゐる。英世は幼名を清作といつた。猪苗代湖畔の貧家に生れ、不具者から身を起して、世界の學界の大權威となつた醫學博士である。その中に、燈もなく勉強したといふこともある。

お父さんは一心に吉田松陰をしらべて居られる。

昔のやうに、今、圖書館といふものがなかつたらどうだらう。そんな時に、時たまから借りて讀むことが出来たら、それこそ夜も一心に讀みとほし、終に夜が明けてしまふといふことがないとも限らない。さいはひ、大石橋には圖書館があるから、ひまな時に行つて見ることも出来る。

今、書物を讀まないで立派に生長して行けるだらうかといふことを考へて見るに、それはとても出来ないだらうと思ふ。もし出来たとしても、ろくな人間にはなれまい。リンカーンはひまな時に本を一心に讀んだからこそ、アメリカ合衆國の大統領となることが出来たのだ。

昔からの歴史をしらべるに、いろ／＼な人が出て、苦心研究をした。その三つを上げて見ると、

神皇正統記 北畠親房

大日本史 徳川光圀

古事記傳 本居宣長

である。本を讀んで修養し、世の中のうつりかはりを知ることが出来るのであるから、我々は有益な書物を多く讀んで、將來の日本をせおつて立つべき立派な人とならう。(兒童文集讀書及圖書館)

三 女性と讀書

八

宇都宮第一高等女學校專攻科二年

椎 貝 彌 生子

讀書は何人にも必要なことであるが、とりわけ女子にとつては大切である。これは讀書に文化的價值があるからであると思ふ。女の人は學校を出ると、本は學校におあづけで、修養とか、新知識になる本を讀む人は、過去に於て、随分少かつたやうである。このことは女性が侮られる一原因でもあつた。婦人は、家庭にあつては、男子のやうに社會に接する機會が少いのである。のみならず社會は日に々々進歩する。こゝに於て婦人は、そしてその任務である家庭は、この進みつゝある世の中に置去りにされなければならぬ。この憂ふべき缺陷を補ふ唯一の道は讀書である。讀書することこそ、文化に接し、社會に接する好機會であるから、婦人はよろしく讀書によつて新知識を取入れ、以て生活の合理化、社會化をはかるべきであると思ふ。

なほこの外、尊いと思はれるのは、讀書の精神的價值である。私たちがこの世智辛い世の中に日々生活して行くに、精神的に非常につかれることが多い。しかし朝に夕に、休息の時に、一書を繙いて見よ。私たちは我を忘れて、悠久にして偉大なる自然に遊ぶことも出来、又、精神が陶冶されては、朝夕の生活に勵みを覚える。まさに讀書は精神生活の清涼劑であり、エネルギーである。女子の趣味としては數多くあるが、この讀書くらゐ、かゝる意味で女性をして品位を保たしめ、思想を奥深くならしむるものはないと思ふ。私たちの崇拜する紫式部は實にこの方面に優れた人であつた。

しかし、これらの美點も、こゝに述べたのは、良い書物の場合である。いくら讀書がよいと云つても、良いも悪いも手當り次第に讀むのは慎むべきことである。

私たちは、つとめて良書を選び、これを熟讀玩味し、以て精神の陶冶をはかり、生活を合理化し、女性の價値の向上に努力したいと思ふ。(圖書館週間記念作文集)

四 讀書の鼓吹

一〇

市 島 謙 吉

今は燈火に親しむべきよい氣候であります。私はこの場合、讀書の趣味を説いて見たいと思ふ。

實は日本圖書館協會は、讀書を鼓吹するために、四五年前から、丁度この季節に一週間を圖書館週間と定め、全國圖書館所在の地と相呼應して、一齊に讀書鼓吹をやることになつてゐます。その方法として、讀むべき圖書を選定したり、圖書を書店や、呉服店の陳列窓に陳列したり、或は讀書の勧めを講演したりしてゐる。今日、放送に依つて聊かお勧めが出来るのは至極仕合せであります。

西洋では、讀書の習慣が如何なる階級にも深く根ざしてゐて、行住坐臥、聊かの時間も無駄に費さず、常に書物を携へて歩き、如何なる場合でも書物に親しんでゐる。汽車、電車の内は勿論、浴場に於てすら讀書をする。既にかゝる習慣が行はれてゐるのに、尙且つ讀書の鼓吹を

大いにつとめてゐる。米國あたりでは、電車の切符や、活動寫眞の切符にまで讀書鼓吹の文句が印刷されてゐる。實に盛なものだ。なほ、讀書を鼓吹すると共に、書物を見るの便利は十分開けてゐる。一枚のはがきに書名を書いて郵便函に投込めば、間もなく圖書館からその本が届くといふ有様である。圖書館は勿論澤山ありますが、それよりも閱覽所が市中の商店など、軒を並べて澤山にあつて、通行の人が直ちにそれに入つて、極輕便に見ることが出来るから、非常に調法である。巡回文庫と唱へて、方々に回つて歩く移動圖書館も盛に行はれてゐます。全體、西洋人は幼少から圖書館に親しみがあから、老人になつても圖書館通ひを決して厄介に思はない。日本でもさうならなければならぬと思ひます。

實は讀書ほど健全な趣味は無いのである。恐らくは趣味の最も高潔なものであらう。日本では、書物を重んずる習慣は無いではないが、とかく此の趣味の普及が妨げられてゐる。即ち、書物の濫讀を全然不可としたり、聖賢の書は必ず机上に於てのみ讀むべきものとしたりするなどは誤りである。濫讀も讀まざるにははるかに優れるのだ。聖賢の書でも、讀む暇が無ければ、車の中で讀んでも決して苦しくない。いろいろの窮屈な事をいふから、讀書の嗜みが妨げられ、懶惰の人が口實に藉りるやうになるのである。

昔、讀書萬能を説いた詩人がゐます。その言ふ所を聞くに、家が貧しくとも書物には糧がある。立派な家を羨むに及ばない、書物には金屋玉堂がある。外出に伴れがなくともよろしい、書物の中には伴侶がある云々と云うてゐるが、いかにもその通りである。これを料理にたとへれば、どんな味も書物の内にある。人のすきくで求めれば、どんな適意のものもある。然るにとかく口腹を肥す糧食は熱心に求めるが、頭腦を肥す糧食を求めるに冷淡であるのは何故であらうか。美食を得ないからというて人後に落ちることはないが、腦を肥すことを怠れば、必ず社會の落伍者になることを思はねばならぬ。

私はいかなる場合でも讀書を廢してはならぬと主張するものであります。實は讀書はその境に依り、おのづからその味を異にするもので、平生讀んで格別何も感じないものも、時と場合により、しみく感ずることがある。又ふだん興味を覺えないものが、時と處により、妙に面白く感ずることがある。常に讀書の習慣ある人の得分はこゝに在るのだ。讀書の習慣があれば、どんな處にゐても退屈と寂寞を感ずることがない。私は曾て讀書の八境を數へたことがある。即ち第一は旅中汽車や船中や旅宿などの讀書。第二は酔後の讀書。第三は喪中或は幽鬱な時の讀書。第四は獄中の讀書。第五は行軍或は兵營中の讀書。第六は病中の讀書。第七は寺院

に在つての讀書。第八は風景地の別荘などに於ける讀書である。これらの八境に就いては既に説明したことがあるからこゝには略するが、私は以上のいかなる場合でも讀書を勧め、そして、これらの境地に在つて味つたり感じたりしたことは、一生涯忘れかねるものゝあることをつけ加へておきます。

とかく吾が邦人はいろく口實を設けて讀書を避ける。或は繁劇でひまがないといふ。しかし繁劇の人には最も讀書を勧めたい。讀書は疲れた頭を和らげ、氣を轉換する妙がある。貧乏だからといふ人もある。しかしこれも遁辭で、志さへあれば、昔の人のやうに、月の光や雪の明りで読めもする。牛馬をひきくも、臼をひきくも苦學をして、成功したものもある。多くの場合、衣食足つての人よりも、窮乏の間に苦學をした人が後に成功するのは、書物を眞味に楽しんで讀むから、ヒシく頭にしみ込んで、義理によく通ずるからである。(春城漫筆)

五 私の讀書

鳥居龍藏

一四

私の讀書の第一期は明治二十二年まで徳島市にあつた時、十九歳までである。先づこの第一期から記して見よう。

私は町家に生れ、家に別に書物らしい書物はなかつたけれども、假名本「平家物語」があつた。これは假名で書いてあり、中に多くの繪が附いて居るから、幼兒の頃から好んで見て居た。最初はその繪に親しみ、後にはその文をたどり／＼り讀んだ。これが私としての讀書の最初であり、また、藏書としての懐しみであつた。

學校以外には、傍ら、幼時から、漢學や國學を學んだ。國學は「日本文典論」を書いた有名な谷千生先生に就いて學んだ。先生は實に藏書家であつた。藏書は國典を主とし、その他ありとあらゆる新版圖書から雜誌類を取つて居られた。先生から本居宣長の「古事記傳」を借用したのもこの際であつた。

その時、私が指導を受けた人に川田秀穎といふ先生があつた。先生も國學者であると共に京傳や種彦の漫筆類を多く所藏せられ、よく先生から漫筆の事を話されて、大いに利益を得た。けれども、先生は私を戒めて、漫筆は讀んで面白く、一見物識にもなるが、これで得た知識は知れたものだ。寧ろそれよりも、正しく本を讀む方がよい。斯くすれば、漫筆類は自然に出來ると言はれた。この戒めは可なり私の頭を支配して居た。

當時出雲國から須佐神社の神主として、吉岡といふ人が徳島に派遣せられて居て、時々神代の説教を私の宅でせられることがあつたが、先生は私と最も親しくなり、神代の話などを直接にせられ、終に「古訓古事記」と、平田先生の神代文字の一枚摺とを私に貸してくれた。この感化は私に考古學のやうな學問を作る基礎となつたと思はれる。その後、谷千生先生から木版本の「古事記傳」を借用して、全部自分が繕くやうになつて、一層我が國古代に就いての研究心が起つて來たのである。私が古代研究に興味を有するのは以上諸先生の刺戟が大いに與かつて居るのである。

阿波藩文庫にもよく行つて「集古十種」なども見せてもらった。この「集古十種」は木版の美しいもので、私としては最も親しみのあつたもので、この印象は最も深かつた。こゝで見た

一五

本はなか／＼多かつた。彼のペルリ航海志もこゝで見ても非常に珍しかつた。

一六

私は幼時から古い事に興味があつた。東京人類學會が東京に出来、同雜誌が發行されるやうになり、第六號の頃からその會員になつて居た。そこで従來の古代研究はこれによつて一變し、人類學や考古學から這入つて、これをして見ようと考へることゝなつた。

それから書籍の購求方はまた一變し、「人類學雜誌」や「學藝志林」を見た。當時「地學雜誌」や「動物學雜誌」などが一時に發行せられたから、これらも取ることにし、著書としては、三宅米吉先生の「史學提要」などは一番好んで讀んだものであつた。その時の日本歴史教科書は今日よりも科學的に編纂せられ、考古學や風俗志を加味するものもあつたから、かゝる書も手あたり次第に讀んだ。當時の私の讀書は、在來の古書とゝもに、新しい書籍の方に進んで行つたのである。若い十代の私は、當時中學生と同様に、英語をやり始めたが、その際、東京から大きな「英語字書」が到着し、これを引いて本を讀んで居たが、この字書が珍しく、見に来た人も多くあつた。(滿蒙其他の思ひ出)

六 讀書と年齢

千葉 龜 雄

明治維新に働いた大立物は知識階級であり、知識階級の運動であればこそ、あれほどの大業が完成し得たわけであらう。知識階級は、當時の言葉で言へば讀書子である。その讀書子の讀書が彼等にとつて重要な役割を働いた。彼等は讀書といふものを重要な生活の一部とした。當時の志士達と讀書から得た卓見は、引き離せない有機的な關係を持つたものだつた。だから明治期の政治家には讀書家が相當多かつた。

書籍の数は、江戸時代までは甚だ少くて、それだけ高價でなり、貧乏人などは書籍に親しみ難かつた。それだけ、讀まうとする彼等の情は熱烈であつた。

過去の悩みは書籍の少かつたことにある。ところが、現代の悩みは讀む書籍の多過ぎることである。出版企業は、寶石も紙屑も、一緒くたに生産する。多過ぎることはあながち悪くない。むしろ幸福である。どんな貧乏青年でも讀めるほどに、圖書館、廉價本がどこにでもある

時代を悪いなど、呪へる譯のものではないが、困るのは、どれをどう讀んだらよいものか、書店の前に立つと、たゞもう大海を前にしたやうな、望洋の感に當惑することだ。そこに讀書經濟學が起らねばならぬ。

白石や徂徠がいくら讀書家だつたといつても、現代人ほどの讀書量は持たない。和本の漢字や假名を活字に見ると、未曾有の大作といはれた八犬傳さへも、精々活字本三冊ではないか。それは現代人の方が、どのくらゐ多く讀んでゐるか知れない。

一體人間が一生に精一杯でどのくらゐの冊数が讀めるのか。佛國の大讀書家フレノアといふ男の計算によると、かうだ。「一人が満足に讀書される時間を一日十時間と見て、一時間に十頁。すると一日に百頁以上は讀めない。たとひ五十年間、大した故障がなく、讀み続けに讀んでも眼を通す巻数は、五百頁程度のもの三千六百餘卷である。けれども實際は、二十歳前には心をこめた讀書は出來ないし、五十歳以上になると、眼が疲れ、體が疲れ易いから、眞味に讀む間は三十年。すると、その間に讀める冊数は二千百九十部内外といふ程度であらう。」と。一生が、りきりで、二千部しか讀めないとなると心細いが、これは一般の概算を云つたので、個人によつて、讀み方はいろいろ違ふ。英國の史家マコオレイは、一つの文章を作るには二十種

も本を讀まねば承知しない。毎朝五時から九時まで古典を讀み、いかなる日でも勵行して、十箇月に、ギリシヤ、ロオマの古典二十一名の著述をみな讀了した精力家であつた。ナポレオンが外征に、特別に作つた小圖書館を携帶したのは有名な話。宗教四十部、敘事詩四十部、戯曲四十部、歴史六十部、小説百部、その他、總計一千部の袖珍形を中味にしたものであつたが、彼はそれをどんな風にいつ讀書したのか。

なほ、江戸期の福岡藩の儒者貝原益軒の「讀書の年齢」に關するものは、前に擧げたフレノアとはまた違ふ。彼によると、讀書は少年の時に限る。少年の頃は、(一)氣力が強くて、多讀に倦まない。(二)暇が多くて、妨なく多讀し易い。(三)年少く氣が盛で、記憶力が強くて、誦誦し易い。反對に、青年以上、老年になると、讀書には障害がつく。(一)すでに君に事へて用事が多い。人と交りが繁くて、家事も多く、暇がない。(二)年が長じて來ると、氣力が減つて、多讀し難い。(三)三十歳以後は、年々に氣力が衰へて、少年の時、一度讀んで記憶の出來たものも、年をとると、十回讀んでも記憶されない。だから、讀書は少年の時に限る。云々。

益軒の少年といふのは、青少年期をこめたもので、それも、主に當時武士階級の生活を標準

としたものらしい。そこで、年齢と読書の關係に就いて、フレノアと益軒の意見を考へて見る。フレノアが、二十歳以前は心をこめた読書は出来ないといふのは、一理がある。殊に、現代のやうな、學校外、家庭外の享樂機關や、その他興味をひかれる誘惑が多いと、じつとして本を読んで居れない。教科書だけ読んで置くことにもならう。一つは、青少年は世間の體驗が乏しいので、本の理論も内容も、びつたり身につけて來ない、よそ／＼しさもある。益軒の讀書觀で採りあげられるのは、青少年期と老年との記憶力の差等であらう。これは生物學上どうとも仕方がない。尤もこれには多少例外はある。しかし、三十歳以後氣力が衰へるといふなどは、封建時代の人間が、いかに生理的、心理的に、早く老衰したかの實例で、これは精力的な歐洲人に恥ぢるがよい。次に讀書を青少年期に限るがいけぬ。第一、書籍には、年が積み重ねば眞實から理解されぬ部類も多いのであるし、また、研究なり、深い理解などは、時間をかけて進出し、その立場を廣げて行つて、始めて本物になる。讀書を青少年だけに置かうとするのは、迷信に似た狭い傳統觀念である。たゞ、壯年以後は、益軒のいふやうに、世事が忙しくて、おちついて讀書されない缺點はあることが確かだ。しかし、讀書が青少年だけに極度に偏重されてゐる日本の現状は、一日も早く清算されねばならぬ。(ペン縦横)

七 讀書の文化的意義

内 田 魯 庵

書籍は五年經つと眞價が定まるから、五年後眞價の定まつたものを讀むのが讀書經濟であるといつた學者がある。百年前のものでなければ讀むに値ひしないといつた博覽家がある。百年は少し長すぎるが、五年も十年も經つた定評ある書籍を選んで讀むのは、時間を無駄にしない、賢い讀書法として、しばしば多くの讀書家に主張される。だが、五年も十年も經つて淘汰されなれないならクラシックである。大抵な人が讀み古したかすをすゝるやうなものだ。

讀書にも色々種類がある。讀書修養一點張りで、論語や聖書ばかり讀んでゐれば足ると思ふなら五年も十年もない。論語や聖書にも新しい研究や批評があるが、さういふ修養一點張りで、批評や研究など見向きもしないものだ。

讀書にも死んだ讀書と生きてゐる讀書とがある。紙魚と一緒に古いかびの臭ひをかいでゐるのは死んだ讀書である。(研究のため古書を涉獵するのは自ら別種である) いくら名著でも、

五年十年経つて、定評が決定する頃には干固まつて、新鮮味が無くなる。かびの臭ひのするのは、百年二百年前の古書と五十歩百歩の相選ばざる舊著となつてしまふ。

讀書の文化的意義は、書籍を通じて時代に觸れるにあるので、いかに名著でも、新鮮味を失つた書籍は、氣のぬけたビールやうなもので、新鮮味のある榮養分は放散してしまつてゐる。さういふ讀書は時代と交渉が無い。隱居趣味である。讀書としては死んでゐる。

科學者は自分の専門の研究の爲には餘り讀書しないものだ。なぜなら、科學者の研究は實驗室にあるので、書物となつて現はれる研究は既に古くなつてゐるからだ。それ故に、科學者は學會の報告の外は書物を餘り讀まないのを常とする。學會報告の外は新刊をもなほ古しとする科學者は、五年十年経つた書物でなければ讀まないと聞いたなら、あきれ返るであらう。

讀書は修養のためばかりでも無い。學問をするためばかりでも無い。私の如きは、隨分愚書をも漁つて、五年十年はおるか百年二百年前の古書を珍重するに於て人後に落ちないつもりであるが、ほんとうの讀書といふはそんなものでは無いと思つてゐる。讀書の文化的に有意義なるは、書物を媒介として時代に觸れるからで、時代の新鮮味を満飽するための讀書家でなければほんとうの讀書家では無いのである。

近刊の多くが愚書で、中に五年十年を待つまでもなく、一年経たないうちに忘れられてしまふものもあるから、一定の歳月を距て、ふるひにかけられた名著を讀むといふも一説であるが、いやしくも讀書家たるものが、自然淘汰や世評の一定を待つといふは何たる不見識であらう。自然淘汰や世間の評價も餘りあてにならぬもので、世間からは一向顧みられないで、世評に上らないものに却て名著がある。名著であるか否かは自ら讀んで判定すれいでいゝので、世評や自然淘汰を待つに及ばないのである。(魯庵隨筆)

八 科學者としての讀書

小 酒 井 不 木

孟子が「悉く書を信ぜば書なきに如かず」と言つたやうに、書を読むにはよほど注意して讀まねばならぬと同時に、良い書物、適當な書物を選択せねばならぬ。科學者であるから科學に關する書物ばかりを讀まねばならぬかといふに、決してさうでなく、物理學者のチンダルはカ

ライル・エマーソンを読んで科學者となつたと言つてゐる。勿論その専門的知識に關しては専門書をよむ必要はあるが、その外に、前にも述べたやうな科學者たる資格を作るに必要な心の修養を爲すためには、専門以外の良書にこれを求めなければならぬのである。英國の名醫シデナムに、或人が、醫者になるにはどんな書物を読んだらよいかと尋ねたら、彼は直ちに「ドン・キホテ」を読めと答へたさうである。シデナム自身はペーコン、シセロ「ドン・キホテ」及ヒボクラテスの愛讀者であつた。しかも彼の鋭き觀察力と豊富なる經驗とは彼をして臨床醫學の大立物たらしめたのである。

高山樗牛は日蓮と平家物語を愛讀したが、夏目漱石は「自分は別に定まつた愛讀書とはない」と言つてゐる。多くの書物を読むのがよいか、少數の書を限つて読むのがよいかは容易に斷定の出来る事柄では無い。しかし書は熟讀すべきものであることは何人も否む所でない。

書物から得る所のは多々あること言ふまでもないが、就中、科學者として書物から學ぶべき所のものは、事物の考へ方と、その思想の言ひ表し方とである。一書を熟讀すればするほど、その著者の風體を自然に會得するものである。

セネカは、書物は深く讀むべく、多く讀むべきでないと言つてゐるが、それは遠い昔の時代

のことで、現今のやうに多數の書が出版せられる時では、この教は一途に守る譯にはいかないであらう。けれども一方から言へば、かくの如く多數の書のあることは、實は一の弊害であるので、やはり現今に於ても、少い書物を深く讀む方がよからうかと思はれる。

ライブニッツは有名な多讀者であつたが、それでも二種の愛讀書があつた。一はヴァージルで、老年になつてもよくその全部を誦讀し得たといふほど愛讀した。他はバアクレーの「アルジェニス」で、彼が椅子に凭つて死んだ時、その手から落ちたのはこの書であつた。ルツソーはブルーターク、モンテーニュ等を愛讀した。彼の著「エミール」はこれらの書がその基礎となつてゐると言はれてゐる。頼山陽は史記を好み、殊に「項羽本紀」を毎日のやうに讀んださうである。

かくの如き例證はこの外澤山あるが、いづれも、文豪や思想家乃至は英雄豪傑の或るものは或る種の書物を愛讀したことを語つてゐる。勿論、人に依つてその愛讀書は區々であるが、良書がいかにその人々の思想や行爲に好影響を與へるかゞわかるのであつて、この事はやがて科學者に當てはまる。たゞいかなる書を選ぶべきかは一概に言ふことが出来ぬが、愛讀書を持つてゐる學者は蓋し幸福と言はねばならぬ。(學者氣質)

九野山獄讀書記

吉田松陰

二六

解題 野山獄讀書記は、安政元年十月二十四日から同四年十一月に至るまでの間に、松陰先生が、その讀了せる典籍名を主として記録し、時に對讀者の姓名を附記し、稀に短評を加へ、又時々練習せる書道の記録を挿み、或は自らの作文著作の題目等を月次によつて列記したものである。右期間のうち、安政二年十二月十五日までは萩野山獄に在り、その後は杉家の幽室に在つた。

思ふに、この三年餘は、先生が實に渴せる者の水に對するが如き關係に於て、讀書と思索に没頭し、遂にその思想を確乎たる基礎の上に統一した重要な期間である。しかもこの間に、獄中でも幽室でも、自らにして囚人や親戚の少年等の教育が行はれるに至つてゐるのである。かくて、この讀書記は極めて貴重なる修養と教育の記録であると言はねばならぬ。(吉田松陰全集解題——玖村敏雄)

野山獄讀書記 (二節を録す)

安政乙卯(三)四月

朔日二日讀了

一、西洋列國史略四
二日了

一、戰國策抄一 土谷蕭海所抄

一、坤輿圖識補四

一、讀書餘適二

一、枕山樓詩話一 了 讀ムベキノ書
十四日了

一、訂正増譯采覽異言七冊

十一日ヨリ 廿五日了

一、通鑑二十冊 六十五冊リ八十四冊マデ

校讎二日ヨリ五日孫子了

一、七書正文

四日ヨリ 五日了

一、魯西亞風土記五冊 有識ノ書ナリ尤モ事實ハ舊シ々々

二七

- 一、鳩巢秘錄一
十一日ヨリ 十三日了
- 一、聽訟彙案三 讀マザルベカラザルノ書ナリ
十二日夜ヨリ講初ム
- 一、孟子四冊 六月十日全部卒業
- 一、制定通
- 一、宋詩選二冊
廿一日了
- 一、海國圖誌二 一上一下
廿二日 廿四讀了
- 一、采覽異言 七ヨリ十二ニ至ル
以上四十九冊了

安政丁巳(四) 歲六月

- 朔日ヨリ 六日了
- 一、詩經品物圖攷五冊 德民ト
朔日ヨリ 獨

- 一、三國志 四冊了 德、榮ト
朔日了
- 一、女誠譯述一冊 佐梅、德民、榮太ト
六日了
- 一、假字本末二冊
十三日ヨリ 十六日了
- 一、神字日文傳一冊
了
- 一、陰德太平記 卅五、卅六 佐梅ト
六日ヨリ
- 一、吉田物語 七八九十
三日ヨリ
- 一、精里三集二 岡部
四日了
- 一、八家文柳歐六ノ冊 五日ヨリ 德、
五日ヨリ
- 一、三國志孫子國字解七八九十

七日ヨリ 十九日了

一、畫斷三冊

一、六合叢談抄 一桑梓景賢錄

一、關原合戰記

右各小冊子、久保清太と校合

十四日ヨリ 十六日

一、八家文歐 玉、徳、榮

十五日ヨリ

一、同歐一冊 熊、徳

十七日了

一、和字大觀鈔二冊

十八日ヨリ

一、懲志錄四冊 内二冊了 佐謙

同

一、外史 豊臣中

廿一日ヨリ 廿七日マデ

一、玉鋒百首解二冊

廿三日ヨリ

一、吉田物語附尾三冊 内一冊了 梅

廿二日ヨリ

一、魏叔子文鈔六冊 内三冊了 樂、徳

廿七日ヨリ 了

一、翁問答二冊

了

一、大扶桑國考上下

通計三十七冊

正月ヨリ六月ニ至ル、總計二百四十九冊

是ヨリ月々四十二冊宛課スヘキモノナリ

375
41

昭和十二年三月二十日印刷
昭和十二年三月二十五日發行
(非賣品)

山口市春日山麓
行啓記念山口縣立山口圖書館

編輯兼
發行人 百村 敏 彌

印刷所 山口市上宇野令二〇九八番地
山口 警海館

印刷人 山口市上宇野令二〇九八番地
小澤 彬 啓

發行所 山口市春日山麓
山口縣中央圖書館

終

